

晒し木綿の白と、淺黄に染分たるを用ふ、これを頭にまとひて、頭巾の代とす、かむりやうに種々あれども、右に一種を圖す、○圖 わろくかぶるときは、石踏直しにまがふ間、能々工夫すべし、猶口傳あり、

〔都風俗化粧傳下〕女容儀の頭にもの著たるは、ふるき禮なるが、田舎にては手拭をかしらに戴く、これを角つゝかくしといふて、禮の一つとす、

〔嬉遊笑覽二〕塵塚咄に、○中 又一向宗門徒の婦人角かくしとかいひて寺參りにかぶるもの綿ぼうしの遺風なるべし、長崎歳時記一、向宗御正忌とて、男子は肩衣を著し、女子はさらし木綿、或はまた角かくしと異名す、新婦兒女といへども、皆是を用と云り、是は寛政丁巳の刻梓なり、

〔秋齋隨筆下〕置手ぬぐひの事

今田舎者などが、頭に手ぬぐひを置は故實なり、あれはいにしへの山かづらといふものなり、日本紀四十一代文武天皇までは髪を不結ひらく、髪で居たなり、その時節にはかづらといふて、木綿でも布でも髪はく、りたるぞ、古今の歌に、

まきもくのあなしの山の山人と人も見るがにやまかづらせよ、と有しぞ、いにしへのかづらの餘風なり、

〔好色一代男三〕木綿布子もかりの世

住家四五丁は帷子の上張置手拭して、跡つけの男を待合せ○下

○案ズルニ置手拭ハ、手巾ヲ頭上ニ置キテ、裝飾ノ具トセルナリ、

〔好色一代男五〕後は様づけで呼

吉野は淺黄の布子に赤前だれ置手拭をして、へぎに切鬘斗の取肴を持て、中でもお年を取られた方へ手をつかへて、私はみすぢ町にすみし吉野と申遊女○下